

触覚オノマトペの呈示モダリティが刺激の印象評定に与える影響

竹迫 杏莉

人間が手触りを表現する際に用いるオノマトペ(以下、触覚オノマトペ)は、その音象徴性によって言語化しにくい微妙な質感をも端的に言い表すことができる。そのため、触覚オノマトペは質感や快不快の評価項目としてよく使われている。しかし近年では触覚オノマトペそのものが質感認知に影響を及ぼすことが明らかになってきている。そこで本研究では、粗滑を示唆する触覚オノマトペが刺激の粗滑と快不快の認知に与える影響を検討した。また刺激の呈示モダリティによって触覚オノマトペの影響に生じる違いを比較した。先行研究をもとに、触覚オノマトペの示唆する粗滑の方向に刺激の粗滑と快不快の評定が変化するという仮説をたてた。また同様に、触覚オノマトペは音韻情報によるところが大きいいため、聴覚モダリティの方が視覚モダリティよりも触覚オノマトペの影響を強く受けると予想した。

実験では粗さを示唆する触覚オノマトペ「ざらざら」と滑らかさを示唆する触覚オノマトペ「さらさら」を、粗滑2種類の画像と粗滑2種類の音とそれぞれ共に呈示した。そして刺激に対する粗滑と快不快について7段階で評価させた。その結果、評定値に触覚オノマトペの影響がみられた。しかしその影響は仮説とは異なり、触覚オノマトペの種類や刺激のモダリティと性質によって微妙に違うことが明らかになった。「ざらざら」は粗い視覚刺激をより滑らかで不快にし、滑らかな視覚刺激をより粗くした。一方「さらさら」は視覚刺激を粗く不快にし、聴覚刺激をより粗くした。

これらの結果から、触覚オノマトペが刺激を評価する際の比較対象として機能したために最終的な粗滑や快不快の質感が変化したと考えられる。また触覚オノマトペと刺激の粗滑が不一致の場合、その質感の差が刺激の質感認知にバイアスをかけたために刺激の最終的な質感が変化した可能性も考えられる。また今回の結果から、触覚オノマトペの影響は聴覚モダリティよりも視覚モダリティと組み合わせた時に強まることが示された。聴覚刺激で触覚オノマトペの影響がみられなかったのは、聴覚刺激の処理が触覚オノマトペの音韻情報の処理に干渉したためだと考えられる。本研究の結果は日常生活における触覚オノマトペの利用可能性を広げる一助となった。(応用認知心理学)